

世間体を繕っているという感が起らない。ところが日本の現代の開化を支配している波は西洋の潮流でその波を渡る日本人は西洋人でないのだから、新しい波が寄せる度に自分がその中で食客をして気兼ねをしているような気持ちになる。新しい波はとにかく、今しがた漸くの思で脱却した旧い波の特質やら真相やらも弁えるひまのないうちにまたもう棄てなければならなくなってしまう。食膳に向って皿の数を味い尽す所か元来どんな御馳走が出たかハッキリと眼に映じない前にもう膳を引いて新しいのを並べられたと同じ事であります。こういう開化の影響を受ける国民はどこかに空虚の感がなければなりません。またどこかに不満と不安の念を懐かなければなりません。それをあたかもこの開化が内発的でもあるかの如き顔をして得意でいる人のあるのは宜しくない。それはよほどハイカラで、宜しくない。虚偽でもある。軽薄でもある。自分はまだ煙草を喫っても碌に味さえない子供に、煙草を喫ってさうな風をしたら生意氣でしょう。それを敢てしなければ立ち行かない日本人は随分悲酸な国民といわなければならぬ。開化の名は下せないかも知れないが、西洋人と日本人の社交を見てもちょっと気が付くでしょう。西洋人と交際をする以上、日本本位ではどうしても旨く行きません。交際しなくとも宜しいといえはそれまでであるが、情けないかな交際しなければならぬのが日本の現状でありま

の場合あなたの方の自然に逆った外発的のものになるからであります。いくら咽喉を絞る声を嚙らして怒鳴って見たって貴方がたはもう私の講演の要求の度を超過したのだから可ません。あなた方は講演よりも茶菓子食いいたくなくなったり酒が飲みたくなったり氷水が欲しくなったりする。その方が内発的なものだから自然の推移で無理のない所なのである。

これだけ説明して置いて現代日本の開化に後戻りをしたら大抵大丈夫でしょう。日本の開化は自然の波動を描いて甲の波が乙の波を生み乙の波が丙の波を押し出すように内発的に進んでいるかというのが当面の問題なのですが残念ながらそう行っていないので困るのです。行っていないというのは、先ほども申した通り活力節約活力消耗の二大方面において丁度複雑の程度二十を有しておいた所へ、俄然外部の圧迫で三十代まで飛び付かなければならなくなつたのですから、あたかも天狗にさらわれた男のように無我夢中で飛び付いて行くのです。その経路は殆んど自覚していない位のもので、元々開化が甲の波から乙の波へ移るのは既に甲は飽いていたたまれないから内部欲求の必要上ずるりと新しい一波を展開するので甲の波の好所も悪所も酸いも甘いも嘗め尽した上に漸く一生面を開いたといつて宜しい。従つて従来経験し尽した甲の波には衣を脱いだ蛇と同様未練もなければ残り惜しい心持もしない。のみならず新たに移った乙の波に揉まれながら毫も借り着をして

しょう。しこうして強いものと交際すれば、どうしても己を棄てて先方の習慣に従わなければならなくなる。我々があの人は肉刺の持ちようも知らないとか、小刀の持ちようも心得ないとか何とかいって、他を批評して得意なのは、つまりは何でもない、ただ西洋人が我々より強いからである。我々の方が強ければあつちの真似をさせて主客の地位を易えるのは容易の事である。がそう行かないからこつちで先方の真似をする。しかも自然天然に発展して来た風俗を急に変わる訳にいかぬから、ただ器械的に西洋の礼式などを覚えるより外に仕方がない。自然と内に醗酵して醗された礼式でないから取つてつけたようでは甚だ見苦しい。これは開化じゃない、開化の一端ともいえないほどの些細な事である。が、そういう些細な事に至るまで、我々の遣っている事は内発的でない、外発的である。これを一言にいえば現代日本の開化は皮相上滑りの開化であるという事に帰着するのである。無論一から十まで何から何までとは言わない。複雑な問題に対してそう過激の言葉は慎まなければ悪いが我々の開化の一部分、あるいは大部分はいくら己惚れて見ても上滑りと評するより致し方がない。しかしそれが悪いからお止しなさいというのではない。事実やむをえない、涙を吞んで上滑りに滑って行かなければならぬというのです。それでは子供が背に負われて大人と一所に歩くような真似をやめて、じみちに発展の順

序を尽して進む事はどうしても出来まいかという相談が出るかも知れない。そういう御相談が出れば私はない事もないと御答をする。が西洋で百年かかって漸く今日に発展した開化を日本人が十年に年期をつづめて、しかも空虚の職を免かれるように、誰が見ても内発的であると認めるような推移をやろうとすればこれまた由々しき結果に陥るのであります。百年の経験を十年で上滑りもせず遣りとげようとするならば年限が十分に縮まるだけで活力は十倍に増さなければならぬのは算術の初歩を心得たものささ容易く首肯する所である。これは学問を例に御話をするのが一番早分りである。西洋の新しい説などを生嚼りにして法螺を吹くのは論外として、本当に自分が研究を積んで甲の説から乙の説に移りまた乙から丙に進んで、毫も流行を追うの陋態なく、またことさらに新奇を衒うの虚栄心なく、全く自然の順序階級を内発的に経て、しかも彼ら西洋人が百年も掛けて漸く到着した分化的極端に、我々が維新後四、五十年の教育の力で達したと仮定する。体力脳力共にわれらよりも旺盛な西洋人が百年の歳月を費したものを、如何に先駆の困難を勘定に入れないにした所で僅かその半に足らぬ歳月で明々地に通過しおわるとしたならば吾人はこの驚くべき知識の収穫を誇り得ると同時に、一敗また起つ能わざるの神経衰弱に罹つて、氣息奄々として今や路傍に呻吟しつゝあるは必然の結果として正に起るべき現象でありま

しょう。現に少し落ち付いて考えて見ると、大学の教授を十年間一生懸命にやったら、大抵の者は神経衰弱に罹りがちじゃないでしょうか。ピンピンしているのは、皆嘘の学者だと申しては語弊があるが、まあどっちかといえば神経衰弱に罹る方が当り前のように思われます。学者を例に引いたのは単に分りやすいためで、理窟は開化のどの方面へも応用が出来るつもりです。

既に開化というものが如何に進歩しても、案外その開化の賜としてわれわれの受くる安心の度は微弱なもので、競争その他からいらしなくてはならない心配を勘定に入れると、吾人の幸福は野蛮時代とそう変りはないさうである事は前御話した通りである上に、今言った現代日本が置かれたる特殊の状況に因つてわれわれの開化が機械的に変化を余儀なくされるためにただ上皮を滑って行き、また滑るまいと思つて踏張るために神経衰弱になるとすれば、どうも日本人は気の毒と言わんか憐れと言わんか、誠に言語道断の窮状に陥つたものであります。私の結論はそれだけに過ぎない。ああなさいとか、こうしなければならぬとかいうのではない。どうすることも出来ない、実に困つたと嘆息するだけで極めて悲観的の結論であります。こんな結論にはかえつて到着しない方が幸であつたでしょう。真というものは、知らない中では知りたいけれども、知つてからはかえつてアア知らない方が宜かつたと思う事が時々あります。モーパサンの小説に、或男が内縁の妻に厭気がさした所から、置手紙か何かして、妻を置き去りにしたまま友人の家へ行つて隠れてい

たという話があります。すると女の方では大変怒つてとうとう男の所在を捜し当てて怒鳴り込みましたので男は手切金を出して手を切る談判を始めると、女はその金を床の上に叩きつけて、こんなものが欲しいので来たのではない、もし本当にあなたが私を捨てる気ならば私は死んでしまふ、そこにある(三階か四階の)窓から飛び下りて死んでしまふと言つた。男は平気な顔を装つてどうぞといわねばかりに女を窓の方へ誘う所作をした。すると女はいきなり馳けて行つて窓から飛び下りた。死にはしなかつたが生れも付かぬ不具になつてしまひました。男もこれほど女の赤心が眼の前へ証拠立てられる以上、普通の軽薄な売女同様の観をなして、女の貞節を今まで疑つていたのを後悔したものを見て、再び故の夫婦に立ち帰つて、病妻の看護に身を委ねたというのがモーパサンの小説の筋ですが、男の疑いも好い加減な程度で留めて置けばこれほどの大事には至らなかつたかも知れないが、そうすれば彼の懷疑は一生徹底的に解ける日は来なかつたでしょう。また此所まで押して見れば女の真心が明かになるにはなるが、取返しに付かない残酷な結果に陥つた後から回顧して見れば、やはり真実懸念のない実相は分らなくても好いから、女を片輪にさせずに置き

我邦の古事記は暗誦すれども今日の米の相場を知らざる者は、これを世帯の學問に暗き男と言へし。經書史類の奥義には達したれども商賣の法を心得て正しく取引をなすこと能はざる者は、それを帳合の學問に拙き人と言ふべし。數年の辛苦を嘗め數百の執行金を費やして洋學は成業したれども、なほ一個私立の活計をなし得ざる者は、時勢の學問に疎き人なり。これらの人物は、ただそれを文字の間屋と言ふべきのみ。その效能は飯を食ふ字引に異ならず。國のためには無用の長物、經濟を妨ぐる食客と言ふて可なり。

これは『學問のすすめ』の一節だが、福澤にとつての學問とは實學だつたのであつて、それゆゑ『古事記』や四書五經を読む事、すなはち「虚學」は徹底的に輕視されてゐる。そして當時の日本は「國のために有用」な人物を必要としてをり、その場合の「有用」とは西洋先進國に追ひ附き追ひ越すために役立つ、といふ事であつた。國のために役立つ學問をやらぬ限り立身出世はおぼつかない。かくて西洋の「虚學」は、『古事記』や四書五經と同様に、無視ないし輕視されたのであつた。明治二十二年、森鷗外は書いてゐる。

西學の東漸するや、初その物を傳へてその心を傳へず。學は則格物窮理、術は則方技兵法、世を擧げて西人の機知の民たるを知らず。況やその風雅の民たるをや。是に於いてや、世の西學を奉ずるものは、唯利を是れ圖り、財にあらでは喜ばず。

先に私は、目に見えぬものに日本人は鈍感だと書いた。「西學の東漸するや、初その物を傳へてその心を傳へず」といふ事になつたのも、明治時代の日本人が西洋人の拵へた目に見える「物」にだけ目が暗み、さういふ「文明の利器」を作り出した彼らの「心」に思ひ至らなかつたからである。そしてそれは今も變らない。「術は則方技兵法」と鷗外は言ふが、方技すなはち技術においてもはや歐米を追ひ越したと今の日本人は思ひ込み、兵法すなはち戰略戰術のはうはこれを無視して顧みない。ましてや西人の「風雅の民」、「徳義の民」たる事はさつぱり理解出來ずにゐる。例へば、曾野綾子女史はアメリカの學者に「アメリカはすべてにおいて世界一でなければならぬのか」と言つてのけたが、さういふ夜郎自大は危険である。曾野女史はジョナサン・エドワーズやハーマン・メルヴィルを知つてゐよう。曾野女史がカトリック教徒としてピュリタンの末裔の狹量を批判するのならよいが、禁酒法などといふ日本人にはたうてい思ひ及ばぬやうな惡法を施行したり、「世界の警察官」としてヴェトナムで自國の青年の血を流したりする國は、『白鯨』や『ピエール』といふ小説が書かれた國なの